

谷の險阻をのぼりつゝ、家路に歸り門首より娘今もどりしぞ娘くどよひけれをかり火の
 一間の裏を走り出ぬつよりもおんかへりのはやうりしといへば今夜の山風さめがしきゆる
 に鹿も猪も驚き走りて手あわぬす化石谷の岩陰にてやうく此兎一ツとりて歸りぬ酒の晝
 は必買てあり是を着ては酒飲んといひつゝわたりを見まとして脛巾草鞋なごのとき捨てあ
 るを見つげ旅人を留しかどいへば娘の篋の水も手を清めつゝされば道を踏迷ひしとてわ
 ぶる旅人を宿しりべりといふ老女はうなづきてそとよくせしぞぬかなる体の旅人あや我ま
 みぬて試べし奥の間にをらば此にともなへといふよや娘は心得つといひて一間の裏に入
 動之助を連れて出来りこれの妾が母にへべりといへば動之助の宿をかりし禮をのべなとせる
 老女の動之助が爲体とつらく見て笑顔をつくりりる山深き栖なれば萬事たらぬな
 れど若わびしくもおぼさるるやかに旅のつうれを休め給へといと懇にいへば娘の母
 の詞を幸にのら旅の郎母もしかまうせ十日も廿日も十年も百年も此よおのせかならず
 見捨てて去給ふあといふ詞のいしくに自然と戀のあらぬ動之助も打どけて母子そろ
 ひての厚き情謝すべし詞もいとすといへば老女とは笑ておん身のむづくよけいづくへの

旅あるや動之助いつりていひけるの拙者の原下総の葛飾に住武士の浪人の子なるが繼母
 に憎まれて退出され立寄べき陰なきゆゑ越後の國にある小の所縁を心めてにゆく旅ありと
 いふ老女又いづくそいつたのしき事なり卒爾なることあれど我此娘見給ふ如く身材高く生
 立ぬれどいまださぶまる婿なければ明日をもしれぬ此老が亡後の心にして世を過べきと
 不便に思ふの親のあらひ此山住のいふせさをいと給ふ心もあくるおん身を婿にといひさ
 して娘を見ればかり火の顔赤くしてのぢらひぬ動之助の老女が詞にしたがひてなや櫛子
 と探り見や思ふにぞ近くよりそのありがたきまでおれたじけなきおふせなり今さあえす
 せし如く水鳥の陸に迷足なき蟹の身のうへなれば此家の婿とあし給ひうへなき幸なり
 どもふおど老女の喜び善い急といふ言あをば今夜假に婚姻の盃をさすべきなり娘戸棚の酒
 もて来よ籠の下を焼つけよ我の兎を料理して肴にせよといへば娘のいどうれしきッ、俄
 に襟ひき結て母とも立いたらさ石の切机石刀料理終りて石酒壺石の盃とりかぬつ松
 吹風の颯々々を祝儀の謠に聞なして三々九度もうりそめに婚儀のやがてすみあけり老女の
 益喜びて何をがな婿引出にといひつゝあたり見まひして釜の蓋と手に把むけ今のらひ釜

の下の灰までも婿どのにまゐらす証はこれとさし出せば動之助はこれを受心ありげな引出物拙者も何かな納采のしるまと思へば愛旅なれを一物もたくはへずせめてこれをど側におりあふ鍋蓋を把わげつ破鍋にはひきりへて筑摩の祭敷もなき玉の器の娘子に似合ぬ拙者は此緘蓋とさし出し互に探る心と心謎ととけねとうちどけてこれ娘を山住の馴の聲のかきら夜風をひのさぬやうに心をつけよおくまりぬ機造の亭坐敷と屏風岩にて風をふせげば暖なるぞうしてへともなへ婿どののゆるかよ麻給へといふにぞしうらばゆるまたまわれとて動之助の立上り娘が案内お打連てかしこの一間に入にたりあどにの老女眉を翠の若者の爲体いふしく思ふもゑ婿に望むにいなみもせずいよく合點ゆかざるもゑ今世にとびこる足利の家の紋一一引両にたとへる世釜の蓋の四海にねはふ引出物なりと謎をかたしけ足利方のまのし者ならんと思ふもゑに我も足利方に所縁の者なりと思はずべく思ひて與へたるに彼又中黒の紋にたとへたる鍋蓋を納采なりと謎かけし我を南朝の味方と察しおのれも南朝に心をよする者なりと思ひせて我に心をゆるさせ我素姓を探ん爲の計略ならん若年に似合ざる即坐の頓智といひかゝる深山へ唯獨のやり來つる大膽不敵唯者とい

かもいれず別にまさいかある謀計あらんもしるべうらす大事の小事よりあやまつなれば今夜のうちに唯一打と獨りあづく折しもあれ相圖の飛礮に石蛤をとつしと打を老女の心得立出て戸と引あくれ燃石は火をともし門方にひかへし手下の獵者秦龜の泥丸郎山蛭の血平太兩人ひとしくいひたるは先刻此山の半途あて旅の若者に出わひ矛と斧よて戦をして試つるお劍法を精熟ししかも早業にて我く敵しむさもゑは這々逃退ひなり彼奴唯者とは憑はれず此よし註進仕らどいふをおさへて聲高にもいふな其若者之此方にどめれきぬ果して我推量にさぐりいよく足利方のまのし者にうたがひなし我彼奴と今夜の中よ打どらばやとれもへとも若打もらさばかの機造の亭坐敷の軒口お釣れく磨石と打べけば其方にてお貝石の螺と相圖は吹合せかの活道をさへきりて打どるべし若又死地に入らぬのから死すべければ手とくぐすにおよそ又此方にて打とらばかねてしめし合せおきたるか相圖とあぐべさぞ此通手下の者等に残りなくいひ聞せよと耳語は兩人の者お打らなづき早足を出して走去ぬ老女は門をさしかため石の刀を取出して腰におび灯火を吹消て拔足しッ、亭坐敷に歩みより梯の上に二足三足上りしぐいさく娘が目を醒しなれば必定妨すべ

ければ宿鳥をさすにしくまじと巖に下りて床の下にくくり入石の刀を引抜て突上る鬘子の
 うへにあきやとさげふ聲もろともに流るゝ血しほ仕すましたりどねもひつゝいそがしく
 梯を上り明障子を踢放して月影にすかしみるおねもひもよらぬ手下の獵者書狐の鬘四郎朱
 に染てのゝ打つ旅人も娘も居ねばヤアとり逃せしかくやしきよとひとりとしりねて用意の
 雷権を取上て掛かく相圖の礮石を打んとせしに屏風の隠より娘より火走出其手にすがり
 て止むれば老女は眼をいうらしつゝさての汝色に迷ひてかの若衆めを逃せしなにくき奴こ
 を放せと突倒して又も打んと踏出す足に倒れながら取つさて手弱き力にとゞむる娘老木
 の松よ藤波のまといつさたる如くなり娘の聲をふりたてこれ母さま妾がいふこと聞てた
 べ日來れん身のあしき業此山に迷ひ來る旅人をとめめれき剛應をこゝろみて強者の味方に
 つら弱者の打て捨又剛なをもも味方につくをうらひかざれば手下の者にいひつけて道をさ
 へざり殺さすゆる非命に死す者幾人といふ歎しれず其悪報のなならずおん身にかゝる
 べしと平日に妾々諫れども聞入玉のぬ無得心先刻此鬘四郎の妾またぬれ得心せずの母人
 のあしき仕業をうつたふるといひしもあるいつりてうけひきたる体にもてなしたると賢と

思ひしのび來つるを幸に相圖に與し鹿笛を吹おびきよせて彼旅人ど入りらせれん身の手
 におけさせし訴人の難をのがれんため旅人を逃せしもまつたく色に迷にあらす生ささめ
 る若人を殺んとのいふしく二ツにの母人に罪つくらすをいとへばあり此のところを聞わ
 きて其相圖の石をうたす何とぞたすけたまはれど泣くいへを老女の益怒りをあし我心
 よの大望あり汝等が知事にあらす彼者を逃しての我家の様子他に漏て大望の妨となるなれ
 ばたすくる事のありがたし放せとあらずふひまよ鬘四郎起上り痛手に屈せぬ強氣者さ
 ての我をしのばせし殺させんためなりしかにくさもよくしいよ、訴人になるべしといひ
 つゝ岩下に飛下る折しも下に血平太泥九郎兩人等しく來かゝりければ老女の上より聲を
 かけ心變の鬘四郎それ打とれと下知すれの二人の心得のけべたちひとしく石の刀を抜て
 斬つけたるに深手に弱りぬ鬘四郎同く刀を抜放て二人相手は打合ぬ老母も益氣をいらち
 取つく娘を突退て礮石を打鳴せば忽四方に吹立る石の螺山響高くひゝ合ていとすさ
 まじく聞ゆつゝ遙の山間谷間に許多の明松かゝりてつらさる星の如くなり娘の四方を見
 渡して獨氣をやみ身をもたへつゝ案内もまれぬ此山中のゆく通くをふさがれての彼お方

のかならず打れたまふべしと歎く涙のひまよりも園をどかせ退のする相圖はかねて聞か
 しと思ひ出てし此方に向け下埋火を外の方に持いでつゝ曲正壺にたくとへる螢砂を掌に
 握て火桶のうちに打入れは火氣よしたかひ螢砂空に高くのぼりけるが相圖を合する螺の音
 もやみ明松の光も漸々消けるにぞ娘はやうく安堵して胸撫おろす時しもあれ何れものど
 もしれき巖の陰よりあらはれ出て娘を捕へ口をおさへて小脇に抱行方もしれずなりにけり
 老女はこれを露しらす螺の音やみ明松消しをいふりつゝ、おは磨石をつり打よ打けるが
 下の方を見ろせば血平太泥九郎の兩人鬘四郎に斬たてられいとわやうく見ぬければ老
 女は雷槌をなげ捨て大さある吸針石をとりあげつ鬘四郎をたらくにしたがひてうへより
 これをつかひけるに血平太泥九郎の兩人と右の刀鬘四郎が刀へ常の鉄刀なれば吸針石の
 氣勢にいざなはれて刀の手の裏狂ふ所を二人の者は得たりとしたみかけて斬つけされば
 鬘四郎のつひに打れて死してけり此鬘四郎は別人ならず是則前の月餘五郎が住家の竹林
 にしのびて餘五郎を打んとしたる堂左衛門が僕なり原獵者なりしゆゑ其後又此業をまて雲
 根の老女が手下となりしが鹿笛の音にあざむかれて殺されしは妻戀鹿を數多殺生したる報

なるべし〇去程に動之助こがけり火が情よりて危急をまぬかれ包を背負て彼家を逃出明
 松にのびよとて娘と興へたる夜光石といふ物の我身の四方五尺をのりを照し外より見れと
 光なし折ふし月雲のくれして暗しといへどももの石を以て道を照して走りけるにぞ 恰白
 晝をゆく如くなり又娘か教けるには是より東の方遙先お路二條あり一條と死地と号一條を
 活道と号瑪瑙の巖壁たる方は 則死地なり是立山の地獄につゝ三稜石といひて劔の山
 の如き巖あれば行こぞあはき水晶の巖ある方は活道にて 則化石谷の下に出心安く麓に
 至る道ありといひける故教の如く活道よ入て走けるよ 忽背後の方に磨石の音ひくとひ
 どしく四方に螺を吹合せ許多の獵者等明松と振照して走集り動之助とりかこみ矛斧山
 刀のたぐひの得物くくと打振て予向ひける動之助の止とを得ず両刀をぬきて左右の手を打
 振つゝ風の如くに打ならし雲の如くにさへぎらし多勢と相手に戦けるが劔法手練の早業に
 斬立ちるゝ獵者等瓜の如くは砍倒され飽の如くは打割れ死人おほしといへどもなほ入か
 り立かへり四方よりとりあひてみすき問もあく戦あざさしもに猛死動之助も双拳四手に
 敵しがたくほぞく危く見ゆる處よ夜露深く立籠たる裏お叫子笛の音聞はけるが 忽黒

さ装束したる武士三人空木を出る荒熊の如き勢して走り出鋭尖をへて獵者等の群
 中に斬て入旋風の如くにかげめぐりて戦ければ獵者等は敵する事あたす蛛の子と散すが
 如く四角八方へぞ逃散ける三人の武士は道暗ければ長追せき舊所に歸りしに動之助とい
 ふうし丹何等の人を我危急を救給へりしぞといひつゝ彼夜光石を以て三人の面を照し
 るに一人は南方十字兵衛が兒子南餘兵衛殘る二人は北岩倉の僕露助山咲庄司が僕夢中な
 ればこはおもひのけぞといひて益いふかしみけるに南餘兵衛いひたると拙者主人山咲
 庄司君命によりて俄に旅立我輩を具して當國に到今此山の麓なる假名寺といふ寺に旅宿
 せり然るおん身今夜獨此山お登給ひしと聞傳てあやうく思われ我輩を召汝等今夜彼山
 に登動之助若わやうき事あらば救べしと命せられしによりて如此といへば動之助の今よ
 とじめぬ庄司が厚意を感激し四人しばらく休息して居たりけるよりの血平太郎の與人
 石の刀を抜そめて岩の陰より歩み出動之助と南餘兵衛とぞまし討にぞ斬つけたり此方の
 二人のいそがしく身をひねり動之助の血平太が首をつしと討おとし南餘兵衛の泥九郎
 を腰車に斬放し兩人一度は刀をぬぐひて鞘よれさめけるが南餘兵衛動之助に對ていはく主

入庄司おん身にまみれて密談ありとまうされたれば一旦假名寺へおひして御對面あるべし
 といふ時己も東しらみ山鴉鳴さわさければ四人ひとしく麓をさしてぞ下りける
 ○前に庄司南餘兵衛お對し深山の濕地といへども遠く音を發する叫子笛をつくれ他日れ
 のづからもちうる持あるべしといひしが果えて此時用たちぬ

おもしろうて頓てかなしき鶴養の腹切

其積礫を 甃て玉淵を 窺ざる者ハ未驢龍の 蟠 所 を 知す 其 弊 邑 習て 上 邦 を 視 ざる 者
 は 未 英雄 の 纏 所 を 知 ず といへる 吳 都 賦 を おもへば 越 の 中 國 蛭 牙 山 の 崖 を 背 後 よ ち し 龜
 毛 川 の 流 に そ ひ 兎 角 といへる 村 中 に 閑 作 といふ 鶴 養 あり 頭 に 雪 は 戴 と 而 朱 を そ ぐ が
 如く 古 來 稀 有る 七 十 歳 の 翁 と 見 ぬ 岩 疊 作 り 營 業 は 朝 暮 に 龜 毛 川 の 鮎 と どり 唯 殺 生 を 事
 として 波 の 滴 の 腰 袋 に 露 の 命 を つ な ぎ 船 鵜 舟 に と も す 篝 火 の 消 ち 後 の 閑 路 を も 更 ぬ ぬ
 いぬ 罪 業 は 日 や 深 く ぞ な り ぬ ら ん 柵 の た へ に 幾 年 と 經 ども しれぬ 大 木 の 古 松 あり 空 に
 注 連 を ひ さ ころ と 様 子 あり げ 見 に け り 比 ま も 七 月 孟 蘭 盆 の 時 なり し 夕 さ す ぐ に 盆 中 の 殺
 生 の 業 を 体 と 懸 棚 を い と な マ ッ 、 菰 筵 に 杉 の 葉 垣 茄子 の 牛 に 瓜 の 馬 苧 莞 の 箸 土 器 も 土

ありたる人の爲浄土の風は瓔珞のゆるく如く掛渡す粟稗稗穂に青菘瓜濁にしませぬ蓮の
 葉も露の手向と見ぬにけり村中の鶉鴉等あるしの招は寄つとひ靈棚の前に圓居して百万遍
 と繰念珠の手つさも常は手馴たる鶉鴉さばくが如くありあるじの開作音頭取發願以至心皈
 命阿彌陀佛念佛衆生接取不捨と鉦打ならず一越調の聲もゆかめる小屏風は押散たる追分繪
 の鬼の念佛に異なら老る若き打交て調子ちがひの六字詰へ縁にむせぶ谷川の黄瀬魚の
 聲りとうさがはれ尻聲のきき責念佛と松の嵐に鳴交る秋の蟬かとおやしまる欠まじりに退
 屈の念佛と奥齒に噛くだけべいづれも御苦勞これからは願以此功德平等にあるじふりすべ
 しといひて鉦打れさめ念珠取おさめて開作の音も皆くお打向ひ問を好が鶉鴉のならは月の半
 と月夜といひ殊盆の中はせれもく休を幸ひ明の十五日が冥日にあたる亡者があるゆる今
 日の持夜に志の百万遍ようつとめてくだされた心ばかりの蓮の飯新酒なとまゐらしても
 てなすべしあれ見いへ盆中の鶉鴉をひらさて鶉等も樂をさする夕罪はろがしちちらも盆
 が骨休め跡踏とも寐まるども心まのせに打つるさて語りめせといひつゝ地獄の釜の蓋あ
 けて盛出す蓮の飯薄ら新酒の徳利酒精進肴どりそえてさし出せば遠慮會釋もなみ居たる

鶉鴉等辞宜挨拶もそまゝに施餓鬼にあひたる亡者の如く或は食或飲啜につくへてむせ
 かへるも鶉鴉の罪どもおれぬくつて漸時うつりて暮影に鳴晚蟬も野邊の鶉に音をゆづり
 芦花の風雪を散し殘燈の光燈を點じて日もすで暮れれ鶉鴉等いあゝまで食いたく酔
 つゝ我家く歸りけりさて此開作につかふる下男に崩築の吳呂藏といふものあり此時船
 に掉さして歸さつ岸の柳に船を繋留をりたけて裏へ入訛聲して最早念佛もすみましたり
 おん身獨でさぞないそがはしくありつらん今夜の空に雨氣がみゆれば船にも苦をかけま
 したといへ開作唯々それはよく氣がついた高燈籠にも火を燃し彼等が飲食に取散したる
 此器ども取おさめ鶉にも餌を飼魂棚も灯明たてよといひつゝ樽と打ふりて五升あり
 し此酒を滴も残さず飲をつた寐酒をくつて寐つられぬ何かの用をしまふら一走り來
 よついでに豆腐小半丁線香二抱錢をくまこよ出まてある我は少刻休息するぞといひ捨て奥
 の一間に人にけり吳呂藏何くぞとまめやりに立とたらき門に立たる高燈籠にも火を點し
 これであらまし用はすむ唯一走りといふた所が酒屋へ一里豆腐屋へ半道菖蒲が池の狼
 に油断があらぬと獨言し櫂のさきに樽をくゝりて打かたげ明松とたづさへていとがはしけ

に出去ぬ夫飛花浴葉のとりなさを観ずれば妻子珍寶何のせん生死長夜の夢の世を驚悟る人なるかまづ年若き修行者の笈を負錫杖をつき打ならす鉦の音いろと松盤の草葉に鳴ぶの如くにて高灯籠と目當に來り殘燈のニツ三ツ風に乱れて露深き葎の門に歩よりこれは回國の修行者なるか行暮て難義よおよふ一夜の宿を御報謝にあづりたしといひ入たり閑作は一間を出て門の戸をあけ今日しも亡靈を祭る日といひ亡ぬる人の待夜あるに修行者のおはせしこそ幸なれいさこなへとむかゆればしうたバゆるし玉はれどて修行者は裏に人草鞋をどたば閑作は苦井の水を汲とりて足をわらはせ鹿末の齋飯を調する間回向をたのみはどていうがはしく輿に入ぬ修行者之笈をうたよせ魂棚に向ひ居て先すゑおきたる位牌を見るに延文四年三月十五日討死大佛九郎貞直靈としるしたり修行者之これを見て或と驚き或は悲むけしきよと落涙袖をまばりまが長ありて懐より香包と取出して香を焼鉦打鳴し南無亡靈願佛果菩提南無阿彌陀佛のみだ佛とどなへつゝ回向をして居りける時に香氣馥郁として家内に薫じ世常ならぬ香なれば閑作は一間の障子を細目にわけて香の薫を訝むかる折しも蛭牙山の雲根の老女此門首に來かゝりてこれも香氣を不思議に思ひまばし窺

居りしが何れ心にうなづきて家の背後よめぐり去修行者と回向を終鉦を打おさむれば閑作は一間と出て修行者の側近く寄今をん身の手向玉ひし名香と楊貴妃の身摺といふ香ならずやと問ければ修行者いづくいかにも然り彼香をさく知らる和主の素姓と何人ぞやと問かへせば閑作いはく先ん身の素姓とわかされよ其うへにて我素姓とも語るべしといふに修行者威儀をつくるひ我實の相模次郎時行殿を守育し大佛九郎貞直が一子なりすぎつる延文四年信州苦形落城の刻戰場にて出生しるよし育たる者物語れり父貞直討死とい聞しかぞ存亡疑しけれの若活あがらへて此世においすなればめぐり會こともやどりく修行者に身をやつし諸國をめぐり尋しが思ひもよらず此家に祭る亡父の位牌さて討死よさひまりしと思へば力も落果てむあしき位牌と拜事よく薄き親子の縁亡父を祭る此家のあるとい必所縁の者ならめと思ふにより探んために焼たる香の亡父の遺物此香包を見られよとさし出せば閑作は是を見て打驚きいさ先これへと上坐にうつして両手をつささて戰場にて生れ玉ひし若君よあ今の何をかつゝむべきかくいふ拙者のいおん父九郎貞直君に仕へし郎等魚淵太どまうす者いからず今夜めぐりあひ奉るもおん父尊靈の導玉ふにうたがひ

なしおん父君の知具麻川に入水して底の氷屑を成玉ふ明の冥日今夜の待夜過し昔をおもひ
 出すもくちをしやと攀をにぎりていひければ修行者落涙しッ、さしうつむらて詞なし関作
 うさねていひけるの壁に耳あり牆に縫めありとまうせ端近にていおん物語もなりがたし
 いさなまへと案内して奥の一間にいさなひぬのくて初更もやく過て雨雲の晴間よりもれい
 づる月影の川波てらす岸づゝひに荷をにあひて心太を賣商人歩み來つ此家の門邊に荷をお
 ろし心太めせちうしやくも入ていおん太の曲突をのぞみ玉のい見せまうさんと聲さのやかに
 いひけれの此村の鵜養等寄集心太の曲突といめづらしき商人いでのぞみて見るべしとて
 取かこめ商人の嗽しつゝそも我商ふ心太の伊豫の國宇和島の名産なり漢名のあまふあ
 り和名の古留毛波又こゝろていどもまうすゆゑところてんとよまなまれるなり「盃蘭盆の
 なかバの秋の夜もすがら月あすますや我こゝろてい」と詠たる歌もいべれば今がもあいのの
 商物あひぞひやゝかあめしひへ曲突をのぞみ玉のいいでく見せまうさんといひつゝ或
 空に高く突あけて皿杯に受留或背後さまふ突て肩を越させ或突て股をくぐらせ或い突
 上て落る所を箸をもて挟などしいろくさまぐく曲を盡して見せければ鵜養等の奥に入

さてもおもしろき商人うなといひはやして我もく心太をうち食錢を與へて立去ぬ折し
 も川風颯と吹て関作が魂棚の灯明を消す暗まされに彼商人四邊を見せはしよのび入て魂棚
 にすゑありし位牌を奪ひ懐にぬし入つゝ荷をになひて行方もしれすなりよけり時お庭の苦
 井の裏より大なる蛇蠢出て鵜の鳥の雛をくへ傍邊の古松の空に入んとせしが忽地上
 に撲的おちのさうちまはり死てけり彼修行者の一間の障子を押あけて瞬もせず此体を見居
 ざりしがあの空をこそ怪けれと心にねさめて打うなづき松のもとによらんとせしが関作は
 むそぎまひて走り出ひうふにまわりておしもどしさてまを偽者観念せよとよばりつゝ
 一腰を抜放て斬つくれバ修行者は錫杖をどりのべて丁と受留又斬つくるを受あがし裏よ
 仕籠し刀を抜て丁々まど、打合ぬりりける時崩築の吳呂藏の買物をとのへて家路に飯
 る其跡より以前の商人抜刀を背後よりくしてねらひより肩尖のぞみて斬つくれバ吳呂藏の
 身をひるがへしてこれを避酒樽を投捨て權に仕籠し刀を抜拂へバ退引の入來往去回の秘
 術を盡し双方おどらぬ蝸牛の角裏にの関作修行者互にのげしき刃の音外方にの吳呂藏商
 人が火出るばかりに戦しが何思ひけん吳呂藏の機の上あかけ上りて川にさんぶと飛入め

拔手をきりて、遊ゆく商人の岸つたひに跡をしたひて、追去ぬ修行者の閑作が電光石火とひら
 めらす刀の光に眼くらみ、勢猛々氣をのまれ、剣法亂きて敵しごとくすでに打るべし見なけ
 るがなかるゝ足を踏どめつゝ、門に立たる高灯笼の引綱をひつぎと斬れば、灯笼の地上に落銀
 河の星か山くにつらなる明松旗捺物夜風になびく雲の波陣、鉦大鼓、鯨波龜毛川の漲音に響
 き合てぬどすさまじくぞ聞へける閑作の刀を引向ふを吃と見渡して、シヤものくしき金鼓
 のひいき我を打んと鎌倉勢遠巻すとれやねたりとひ萬騎の敵たりともなでう事のあるべ
 きやあな小黙々と冷笑油断を見すまじ修行者か又斬つくる刀をひつしと打落し手やく側
 に引つけて膝の下敷たる折しも雑兵許多かけ來り鎗をひねつてつめ寄たり閑作の修行者
 を搦退庭ゆをり立身がまへして突來る鎗を左右に握り一ツもぢれば二人一度にひるがへり
 倒るゝ上を飛越て又突かくる鎗の血留を捨て蹴やれば鎗の手を放ち四五間飛で大勢の群
 中に倒れたりなほこりせまは隙間もなく鋭鋒をとろへて突鎗の篠をつかぬる急雨の如くひ
 らぬく光の雷光の山の端めぐる如くなれど是を物の數をもせず飛龍の如くにかげめぐり猛
 虎の如き勢ひして前後に當り左右を又へ陸離々々と斬拂へば雑兵等の敵しかねしどろにな

りて引退く修行者の隙間を見て背後抱よむせと組を腰をひねりて振はせき襟首搦てうごり
 さす仁王立に立たる處に弦音高く鳴ひいきて白羽の箭飛來り閑作の胸板をひつしと射たる
 がうらをかかず矢幹くだけて飛散ぬ閑作と阿々と打笑形も見せず遠矢を射たる卑怯者我
 身の鐵石かゝる弱矢の立べきのと嘲彼方又聲高く
 またこんと頼の雁の別路の待間ひさしき名残なりたり
 と思ひもりけせ一首の歌を吟せるにぞさしもの閑作おとろけバ又いひく大佛九郎さのみな
 さのきを月影个谷判官の家臣替元動之助氏邦見參すべしとよべりつゝ、遙向の木陰より
 あらわれ出て歩來る其促装いかにとなれば緑なす額髪を玉なす顔は颯と振かけ双蝶の金物
 打たる顔巻を結たれ小櫻威の腹巻に丹地の錦の陳羽織を著下て秋野の摺箔したる白精好の
 大口の黄金作の大刀を鴈尻よさげ佩て頻藤の弓を小脇にりいこみ物具の金物を月影に
 耀し光渡りて歩來る其形勢志氣堂々威風凛々たる若武者なり閑作の肩をすりては、そ
 笑事やしげよ名乗し故いかなる荒武者か出來とおもひし手にも足ざる小冠者原討手の大
 將なんせととかたいらふしよかのみなのす我をさして大佛九郎と呼りけし何の狂言貞

直殿の如具麻川に入水したるをしらざるや擲殺と受けれども童を相手われとかけあし汝が命を汝と與へてゆるしやるべく〜飯れと高笑回さるにやざく不敵の詞動之助の少も臆するけまきなく莞爾と笑入水といふや 則偽人を欺 死間の計畧今あらわれてくちをしるらん先比鎌倉極樂寺の切通に於て我養父背元湛右衛門を遠矢にかけ日月のおん旗を奪取し汝あると疑なし其證據は是なりとて腹巻の引合より矢の根をいざして目前にさまつ々此矢の根にわがわららん養父を射たる此矢の根の地國よまれなる鐵石我是と證據に仇をたづね蛭牙山の麓に宿り木枯の森の邪神人身御供をどるしに射る矢なりといふを見れば今我射る矢よてこれもおなじ石鐵なればまれば仇の手かゝりと思ひ人身御供の棺よ入かの社よ到て 試つるに果て眞の變化あらねばいよく怪みりの山深く登て見るに化石谷に鐵石多あり又石の刀を用ると鉄刀に異あらず察る所梓巫とありて月影个谷のかん館に入籠しも彼奇石が洞に住老女なるべし曾十洲記にいへるとあり西海の流州に毘吾石あり劍に作に水精の如く玉を割に泥を切が如しと云り又玉氷素問を注して云肅慎國の人枯木を以て矢とし寶石を鐵とし毒を施之人に中を即死これを石弩と号く又滕州よ青石を

以て刀劍とあすと銅鉄のごとしといへり汝これ等にならひ化石谷の鐵石に毒を施し湛右衛門を射たるに疑なしと思ひま故假名寺を陣所となし兵具をどゝのへ向ふたり養父の敵といふハ私知具麻川に入水といつたり活殘て足利殿を亡し北朝をかたふけんと味方を集る謀叛は張本大佛九郎貞直とく〜本名名告べし君命おもき打手の大將助之助氏邦汝が首を打取て初陣の高名にすべきなりとするとき詞の舌劍に勇氣烈しき閑作の肝さき突るゝ如くみて眼血をしり面色變頭の汗烟の如に立のほり芦花の如くなる鬢髭をそらさまにひるがへし牙を嚼翠を握鼻をふさいからし堅庭を踏あらしつゝ我 自意を蟠龍に比して泥中に蟄し魚鼈と伍をおなじうして升天の時至るを待つるよ汝等如き小冠者者らに見わくとされたるくちとしさよさにてもいふのしきと我苦形の戦場よて生子にそえさる香包の裏にしろせし一首の歌汝今吟せしはいかあるゆゑでそれ聞んといひけれを動之と唯々其不審理あり委語て聞すべしといひて腹巻の引合より位牌を出し我先刻南餘兵衛といふ者を心太賣の商人よ身を扮させ奪とらせし此位牌に大佛九郎貞直靈としるせし是 則養父の仇の形代なりかの豫讓が衣をさしたる例にならひ今父の仇を報なりおもひしれやとよばり

つゝ太刀とすらりと抜放して位牌を切割いそぐとしく物具を脱捨て雪の如くなる膚を推膚
 脱太刀をさうしまに取直して脇腹に突立より大佛九郎の益いふかり汝何ゆゑ自殺するとぞ
 問けれバ動之介苦き息をつきて云君思れども嚴命されバ黙止がたく生ハ謀叛の張本を打手
 の大將二ツには産の思よりなほ深き養父の爲の復讐公私とまかる忠孝二ツ見のがす事のお
 たのされバ死して親子の名告をせんと其故に此自殺かくいふ拙者の苦形の戦場にて出生し
 たるれん身の實の子なるぞや其證據見給へと陣羽織をさしいづし是を着して打手に來し
 ころねて自殺の覺悟ぞといひければさしもの貞直肝つぶれてとつかと坐し陣羽織をとり上
 て好々見るにまがふ方なき雲鶴の錦をばさてハ我子にてありしかと猛心もよわりつゝ
 唯惘然たるばかりなり良ありて修行者ハ打向ハ先刻汝香包を證據にして我子ありと名告
 しガ苦形の落城を指折てかぞふれば今年で丁酉十八年汝が年のころはひハ二十を過しと見
 ゆるゆる偽者と推量せしハ又汝をいつはりて郎等劍太と名告し汝をあさむさ人質に取れ
 くの計策なりとも汝何ものぞと問われバ修行者云汝自我名を位牌にしるしおささしと
 死間の奇略と察せしゆゑ動之助が所持しゆる香包を假名寺の陣所あて受取かの香を焼て汝

がふるまひを 試より我實は山咲庄司が一子山咲餘五郎雪村といふ者なり先頃兄山咲窓閑
 宅に 紫の装束してしのび入朱塗の箱と奪出たる曲者と窓閑からめとりて責問つる
 に大佛九郎貞直が郎等魚淵劍太といふ者なるが南朝の帝古今傳授の秘書をもどめ給ふによ
 り其秘書のおさめある此箱を奪出しと白狀し其時彼が物語にて動之助が素姓をくはしく知
 つるなり大佛九郎が存亡のいかゞとあは責問しが入水に疑なしといひて白狀せず火水
 を以て賣たれどもあはいハ自舌を喰切て死しつるあり先刻汝が魚淵劍太と名告を實
 とせざるハ其ゆゑなり假名寺にてしめし合せ此家に立し高燈籠と切落を相圖とさぶめさて
 こそのくハからふたりといひければ貞直いハくしからばいよハ我子の背元濫右衛門又
 育られしなあやまてりハ濫右衛門の元來主君相摸太郎殿を敵の手に渡して打しめたる不忠
 至極の五大院左衛門が子なるゆる一ツにハ日月の御旗を奪ん爲二ツにハせめて其子と打て
 相摸太郎殿の警を報いんとせし事なるの今おもハ思を警にて復せしかりかへすハも
 わやまてりと歎息しつゝいひたれば動之助ハあは苦げ息をつさされバハ生子のときより
 育られ大恩うけかる養父の仇をむくハんとすれを實父のおん身を打ねバあらせそれゆゑに

養父の仇を射かへす心で先刻射かけし白羽の矢の鏃をいふきて射かけしは養父の爲には弓
 を引産の親に對して引ぬといふ心にて是父子の義を二ツに分ていづれをも重する所なり
 養父の敵が實父にてあらんと露思とす世界のうちに惡因果を此身一ツに引受てくるしき
 者は我身あり推量えて父うへといひつゝ、そに這寄てとす涙と疵口の鮮血と共に何と
 をしれば烈火の如き貞直も打しはれ又陣羽織を取上げて片手に介抱し、いひけるも苦形
 の戰場にて汝が出生せしときに此雲鶴の地紋を幸ひ此子の齡千歳の鶴にあやかれと心に
 祝せしうひもなく霜を愁む夜の鶴子とたもふて泣爲の証となりし因果さよ生れたる時極楽
 にしたる此羽織が今死ぬ時の經帷子となるべしといかでかおもひとべるべき此錦はいの
 なる者の織なしてかゝる因果を見せけるにやといひて羽織をひしと抱さしめ萬夫不當の勇
 將も恩愛といふ大敵には背後を見せて泣居たり時、不思議や荒鶉ども籠をはなれて軒轟し
 鶯を鳴し、動之介に飛つきくくしひれば動之介はあなやとさけび裏わなきて悶
 絶し此世のうちの抜目鳥地獄の阿寶眼前無慙なりなるありさまあり此時月とふらふび又雲
 にかくれて暗かりしが岸に繫し苦船より山咲庄司雪森鉄巾野袴陣羽織籠手脇楯に身をのた

め苦かなぐりてあらこれ出のんどう提灯振照して門口に歩み寄裏の様子をうかいひぬ貞直
 の聖靈を送る火の薪にと用意しおきたる麻幹をつかねて火を燃し明松にしてふり照し動
 之介が荒鶉どもに責らるゝ苦痛の体を吃と見て且怪且悲み涙瀾然腰義を散り、りて波の
 滴に異ならず蛭牙山の雲根の老女いつの卒どにかくれ居けん此折二階の障子をひらきて
 座し、る柔白髪の頭に髻紐錦の袴緋袴笛をよこへ吹ならず其音凄風楚雨の如きとい
 哀をそえにけり貞直涙を押し、ひあなあさましや身の罪業を今ぞ知る懺悔に罪を滅すと聞
 べ我愛業のあらましを語るべし

實や世の中をうしと思ひ捨べたよ其心更ら夏川に鵜つかふ事のおもしろさよしめる
 明松振立て藤の衣の玉たすき籠をひらきて取出志高巨巢れろしわら鶉ども此川波よ
 らつと放せば面白のありさまや庭にも見ゆる篝火よおどろく魚を追まひしかづらわけ
 すくひわけひまあく魚をくよとさきと罪も報も後れ世もわすれいへおもしろや
 其殺生の罪おもき親の因果が子よ報荒鶉の責の不便さよとて明松を投つくれ鶉の鳥ども
 いをつと退動之助いつく息も絶やよどなりにたる雲根の老女も笛をおさめいそがりしく

二階をかけをり動之助をかり抱き苦形の戰場にてそなを産する實の母更級といふ我身
 なり産と其儘活別れいづくに居やとおもひしに逢バ忽死別の歎きよく〜簿子親子の縁
 いかなる者ヲ親とちり子と生てと來つるぞや娘篝火ヲ行方しれざるゆゑもし爰へ來いせぬ
 うと先刻爰へ尋に來て門口に彷徨しが修行者の焼る香のいふかしさよ裏口より立入て様
 子の殘を聞しりぬ我子とい露しらす足利方のまはえ者と察せしゆる殺さんとまで思ひし
 我悪業の報なり不便の者の最期やと聲くもりつゝいひければ手負のやう〜起上りさて
 實の母人ヲ親子は一世と聞なればよく顔見せてたまひれとて母の手を握りつめ見あぐる顔
 見おろと顔大膽強氣の老女あれバ目をもる涙 鬼薊に露おれあまるおとくなり先刻より門
 首に様子を窺 山咲庄司此時裏より走り入いかに大佛九郎殿戰場にて互に面を見しらねと
 も名いりねて聞給いん月影个谷判官の家臣山咲庄司雪森とい我事なり陪臣なれども主人の
 名代ゆるされよ我苦形を飯陣の折から山風は吹落して我手に入し密書の一通隠語を以て記
 せし故事分明あらすといへとも當名の太佛九郎とわれバ入水せしは偽ならんぞ我推量に果
 てたがはず死間の奇零今あつりれてさぞくちとしくおぼされんぞ禮儀正しくいひければ貞

直も威儀をつくるひたどひ千騎万騎をもつて攻む物の数どい思はねども子といふもの
 大敵の敗軍したる我なれば今いづゝますものなれば我苦形の一戦にたゝかひつかれて打
 死と心をさだめし其折からのかたす飛來る箭文の一通ひらさて見れば主君相摸次郎時行殿
 隠語と以て自筆にのりし奇密の文我腹腹を切て暗に城を落るゆゑ汝も打死するとありれ
 ど記されしゆゑこのよくいりられしと思ひつゝ知具麻川に入水と見せて敵を欺きりねて水
 練に逢せまもる水底をくわりて逃去ぬと物語れば庄司いひく我とくよりしあわらんと察せ
 しあり主君判官 梓巫が詞を信じ相摸次郎殿苦形まで實に死亡ありしと思はれし誤あり
 時行殿の行方いかにと問なるに貞直の口ごもりていひさりけり時に又陣鉦大鼓を打鳴し
 彼方の岩陰より二ツ引兩の旗をさつとなびりて月影个谷玉兎之介身上おとそかによるひ
 露介夢本等兩人は案内させて岩上より出來り聲かやかにいひける九郎貞直よく聞べし我
 父判官照影此度足利殿にさこめて北朝の帝に奏し奉り南北兩朝御和睦あるべきに定り足利
 殿より吉野の皇居に進奏する御和睦の盟書をまうし受てこゝにありそれにつか勅して時行
 も助命し給ふなれいづゝます行方をまうすべしといひければ庄司も其詞の尾につきていで

いれよいで聞んとぞ責たりける時よ老女すゝと出其儀は妾が物語いんそも相摸次郎殿
 の箱根水飲峠の合戦の後と深山幽谷の裏に蜃しおひして鎌倉には面を見知者なきを幸ひ宮
 奴に身と扮させ幣又と名のらせいごと妾り従者の様にあつうひて世をしのばせませしな
 り又妾味方と集ん爲鎌倉を徘徊しゝる時奇石が洞ある蛇石を大指にひめて諸人を欺き蛇
 个谷の因果婆と呼れし妾なり其刻箕原蟻右衛門袴田紺九郎等を味方につけしが彼等おも
 んばかり浅き故密軍あらこれ出走して其後戮せられざるよし鎌倉の風聞にこれを聞ぬ又都
 にありし時五條坂の阿曾比吾妻が所持したる鬘髪の名笛を奪しいれと原亡君相摸入道殿
 の笛なる故にぬん形身とも見やよとかもひて奪しなり則今吹たるの其笛なりといふにぞ餘
 五郎いこれ聞老女をよくく見るに見知あをばさてと其時我よとばれたる老女とおん
 身にてありしといへば老女は打うなづきつゝ又いはくけにめづらしき對面あり其後妾太麻
 の巫女と名告てふたゞ鎌倉にありしとき月影个谷判官の息女病あやむと聞幸ひ時行殿
 宮奴お扮して鶴个岡よぬせしゆゑ巫女の噂をさせ月影个谷の館に入籠梓の弓を載る器の
 裏に火氣と仕籠化石谷に生ずる蛭石といふ奇石を暗に洗米お交て詩散し火氣にしふ夕ひ蛭

の毒やうに見ゆるを洗米裏に蛭も化したりと思として歎さしも日月の御旗を鶴个岡の神
 庫より出さしむへき計略なり又我く夫婦一ツ所に住ざると人の疑といとふゆゑなり妾の
 蛭牙山よ別居し味方の者を獵者にして山中にすまひせ彼等にいひふらさせて木枯の森の邪
 神といつはり白羽の矢をしるしにして人身御供を取りし其子を遠國お賣渡して軍用金を貯
 め獸の皮に化石谷の天狗の瓜石といふものを植てこれを妾が手にねらひ眞の變化と思ひせ
 たり或の奇石洞化石谷の玉石薬石を取出て黄金よ替ぬ又砧お用ひたる石の腕首の原化石
 谷に葬たる五大院左衛門の死骸の石に化したるなり彼の遺骨をばづかしめ相摸太郎殿の恨
 をはらさん爲に砧にして常に打ぬ今思へば人身御供とみつりて人の子を奪たる我悪報
 忽我子の身に報あゝる愛目の罪科を滅せんための懺悔ばなし此家の下人崩築の吳呂藏と
 いふの則宮奴の幣又にて實は相摸次郎時行殿にひなりいよく助命給れりし妾の過つる
 元弘三年鎌倉にて打死したる長崎勘解由左衛門爲基が妹なり素姓を語るもいつりしやとい
 ひければ庄司いにくさればこと女にまれある膽氣の烈しきおん身等夫婦のきみくならぬ
 人なるに忠義には似たれきも善をもつて行とせざる事情むべし残念さよ崩築の吳呂藏とい

ふの時行殿は疑なしと我推量に露たぐとす助命の儀と氣づかひあるなどのべければ老女の
 いくと聞ばもいや此世に望なし我子と共に死出三途の旅立せん去あから娘のいり火にあ
 とで死るが残念なり南無あみだ佛と唱つ、懐劍吮に突立れば真直も居直て今妻の話し如
 く夫婦こゝろを盡しさまゝの罪をつくりて貯たる軍用金のまごの時の鐘腹巻これ見ら
 れよと諸膚脱を肌着にひしと許多の黄金を縫つけて鶴の羽をかさねし如くなり動之助か射
 たる箭幹のくだけ散しもことわりあり真直又いひけるい、兩朝のおん和睦さだまるうへよ
 時行殿の助命われい我屋外になし唯一目ひたさは娘のいり火行方しれぬい不思議あり親
 の死目にゆゑざるい宿世なるうと落涙しよべし歎に沈しか吃と心をとりきはし大音あげて
 名乗ける桓武天皇第五の皇子葛原親王の三代の孫平將軍貞盛より十三代相模入道高
 時の御内に鬼神とよべれざる大佛九郎貞直を皆元動之助氏邦初陣に打とつり手柄を見よ
 や讚よやと自らい、いりつ、肌着をくつろげ刀を腹に突立れを山咲庄司立寄て天晴由々敷打
 死ぞやと賞美して餘五郎と打向ひ汝が奪し人質いもいや用さし父母の死目はせめてあし
 めよといへば餘五郎心得て笈の扉をひらくをよろしと其裏よりまろび出し、則是かゝり火

なり父に取つさ母に取つさ動之介に取つさてかあれたるを迷ひつ、聲ふりよて、泣きけ
 びがばと伏て身をもだぬ現心もあかりしが良ありて起上り動之介りたつさへ來る石の矢
 の根をとるても見せき、吮に突立んとし、るを老女更級いそがひしくおしとめこや娘
 せめて汝の生残りわれく、亡後の追善供養香花とも手向てくれよといへ娘の聲くもら
 し今笈の裏にてくいしき事をうけたまひれい動之介殿といふい妻か兄にてたのすよまをれ
 といしらすいすのしなうら戀の重荷を身に負て石の枕に假寐せしは此世くらなる畜生道な
 せとながらへ居らるべきといひつ、又打伏て泣沈めば真直い、い其儀ならなくるしかたを
 汝の原我實子にあらず十四年前我鎌倉をうかいはんためしのびて守越る道武藏の籠手差原
 にて大鷲四歳ばかりの兒を喰んとするを見つけて殺し其兒をたすけ取て立版り育上し
 い、則、汝なりさるゆゑに動之介とい兄弟ならま、と物かたる庄司いこれを聞とひとしく其兒
 の高頬に黒痣のあつりしかといそがひしく問ければ真直い、いそれを和主い、いうに、してし
 りけるぞいかにも高頬に黒痣今にありそれ見られよと突やれば庄司とつぐ、打よもりつ
 てい我子の小雪ようたがひさしと喜びつ、甘糰れ神事のがへるを驚にあらわれることをあ

らまし物語をこれに居る餘五郎といふと汝の兄ありといへばかゝり火のさして妻の父實の兄にてれいのかとて庄司餘五郎は打向ひ喜ぶも又涙あり貞直夫婦の痛手に屈せど我の夫婦死したるをへ謀叛人の娘と人お指さしれ路頭に袖をひろげても情をうくる人もなく愛目を見んをなげかとしくおもひしにとからせ實父あめぐり會手渡すれい我くが冥途までの忘念なしよろこひしやと夫婦の者のゐるにいひけれの庄司は刀をすらりと抜かり火の緑の髪を切取て今より汝尼とあり貞直夫婦の菩提をどひ養育の大恩に報せよやよ動之助夫婦は二世といふなれば後の世の此娘を汝が妻よなしくれよ此切髪は婿引出冥途の土産に持去と落涙しつゝ手に渡せと動之助はおし戴唯掌を合ばかりなり貞直は荒瀬と笑ひあなられしやよろこばしや我も又納采れしとして娘にあたる物ありとて左の小脇に突立たる刀れ手をかけ石の傍腹まで切目長く掻破て中なる腸を手繰出し傍邊の松の空よ投入たるに忽枝葉動揺し血しやの穢を忌けるにや空の中より風を生じ白木の箱を次上より餘五郎手やくこれをとりてひらき見るは是則日月のおん旗なれと其まゝ玉兎之助も奉る玉兎之助はこれを取てうやくしく押戴兩朝のおん和陸すひまでは此おん旗の

れしばかりあづかるべしとて取らめけるとき再陣鉦大鼓を乱調に打ならず折しも烈々川風に一間の障子を吹倒せしに逆に見渡す龜毛川四方の山は旗捺物陸より明松川あり火天を焦せる如くにて水にも輝く火の光南餘兵衛が下知にしたがひ鶴養ども數多の船を漕出して崩築の吳呂藏が乗たる船を取かこめ呉呂藏の相摸次郎時行と本名を名告つゝ阿修羅王のあれたらんものくやとおもふ勢にて寄來る鶴養を手玉にとり投む水音水煙れめささげびて戰聲川波の漲音にひらき合てすさまじかりなる光景なり貞直夫婦はこれをみて助命といふのつりにやと訝は玉兎之介いひけるかなら走疑となりれ諸軍をもちひす鶴養どもも戦すは足利殿のさここはばかり助命のすこしもいつはりならずいで我自立越て時行殿に對面し和陸助命の盟書を渡して戦をやめさすべしといへば側よつさそと露介夢平心得て馬引寄れば玉兎之介もらりと乗一鞭めてんとしふりし動之介が死別をかなしとしはしむもたふ唐綾の鎧の袖にちちのる涙をおさへ露介夢平いづれも續と下知しつゝ山を巡て走去ぬ程なく彼方に揚目を吹立るとひとしく陸の明松船の篝火一度に消て忽暗夜の如くにあり戰聲も己に止て唯松風と川波の漲る音のみ残り貞直夫婦の安堵の体

庄司の夫婦に打ひらひおん身等の集し金の鎌倉葛西谷の東勝寺お着附あして相模入道殿一門の菩提をとふべき料となし又人身御供といつゝて奪たる子とも等のゆくへとたづね身をわがをひて其親くにかへまつかははべし又高德の僧をゑらび化石谷の小石をとりたとい宗旨のちがふとも利益ふかき法華經の題目を二石に二字づゝ書しめて此川に沈めおん身等親子三人の佛果菩提のためすべしと誓し言と經石とも鵜養石とも云傳て末の世までも残り夫婦の益感激し今のとやとて呪かき切て伏けれバ動之介もともに呪をかき切て夫婦親子三人が一度に息を引沙に水のあはれを殘しけりかへり火獨生殘る歎の筆に盡されず貞直行年七十歳更級行年六十歳動之介行年十八歳とぞ聞ゆる時も時ある魂棚の瓜や茄子を其儘に手向よするや龜毛川西方淨土へおくり火の鵜船を弘誓の船となし稻葉の露に浮雲も法花の法のたすけ船一葉の秋と散て行鳴音うなしき籠馬の籠題目の功力よて實相の風吹て真如の月の出ぬれば山咲庄司へ餘五郎に親子三人の亡骸の葬を懇に命じつゝ娘もしばし此家にて佛事供養を營べしといふ打しも南餘兵衛走來り相模次郎時行殿和睦の盟書を内見あり情にのむりふ劔なしとて戦を止玉兎君ともにもに假名寺の陣所へ打越れしといへハ庄司

これと聞えからを我も急ぐべしとて餘兵衛を具し歎と跡に殘しつゝ假名寺をさして出去ぬ右又記し殘せし事あり苦形の戦の時魚淵劔太主人大佛九郎の生子をあづかり山越に落行し鎌倉勢も取かこまれてせん方なく生子を山神の社の裏に隠し置身がるになりて戦し夕皆元澁右衛門權籠の應兵衛といひし時其社の前を過生子の泣聲を聞つけて槍子ありと思ひ陣羽織もつゝみ香包をとえたるを見ておみくくの人の子にあらざるを知不便に思ひひろひとりてかへり劔太は鎌倉勢を追らひて醫所に歸り社の裏を見るに生子をかりけれバ大にくやしみますでに自殺せんとしたるが主人の妻更級の行方をたづぬるために生をがらへ其後山咲窓閑が家にしのび入て捕れたる時物語れる事と澁右衛門がかねて動之介に語りおさける事と符合するを以て動之介は苦形の戦場よて生れたる大佛九郎が子なりといふことおさらかお知けるなり此子細を前回にしるし入ぬのくだくしけれバ此に別記して看官の疑を解のみ

⑤鶴をりて日こそおはきに和睦の酒宴

去程に相模次郎時行の和睦の盟書を携て吉野の皇居に到り是と進奏しけるよ南朝の帝殿

慮をよるこやしめ給ひ已に南北兩朝御和睦のひければ時行今の望たれりとして剃髪し佛門に入日月のおん旗の舊の如く鶴ヶ岡の神庫におさむ苦形の合戦より大佛九郎の亡しまで都月影谷判官父子の武略によれりとして父子はもと位階昇進ありこれによりて玉兔之介前の不行跡を悔おもひて文武をいげじう外他事おし妹姫の病全快して梅ヶ谷郡領の嫡子に嫁し兩家ひつみ深し又山咲庄司が忠義軍功拔群なりとして加増とたまはりければ兒子餘吾郎を歸參させむらためて吾妻と婚姻をむすびぬ庄司が妻淀瀬が喜びいひつくすべからず南餘兵衛をも歸參させ亡父南方十字兵衛が縁に加増して與へければ益母に孝を盡し窓太郎を養育し朝島の刀を家寶とし孝子の美名世に高く聞へぬ皆元濹右衛門が妻於破矢の剃髪まで尼となり篝火の尼と共に鎌倉霧が澤の月輪寺の境内に庵をむすびて住大佛九郎夫婦および濹右衛門動之介堂左衛門等が菩提をとどむ五大院左衛門が五輪の塔も月輪寺にうつし建其下に彼石の腕首を埋てしるしとす放駒の小柄の小刀も同寺に寄附しけるとある又大佛九郎夫婦が集おきたる金の相撲入道一門の自殺ありし東勝寺に寄附し濡髪の名笛揚貴妃の身すりの名香のあごりも同寺におさめて寺寶とす僕露介の武士に取立られて餘吾郎お仕へ妻

於關と共に益忠勤をいげみぬ僕夢平も武士になりて庄司に仕ふ玉兔之介の衆僧を供養して白拍子都動之介等兩人の菩提の爲とす餘五郎の紀州高野山に祠堂金二百兩をおさめ祖父の靈を祭て前の罪をおがなひ又十字兵衛が靈を祭ると懇なり蛙鳴丸の刀を家寶としかの竹の刀は一生守刀にきて自短氣をつゝみぬ山咲窓開の古今傳授の秘書を南朝の帝に奉り玉兔之介より扶持を受けて隠者となり狂言綺語を翻して讚佛乘の因轉法輪の縁とて白拍子都が菩提をとどふ事厚其名の後世は朽を燕子花の句夏の澤水の句人口は膾炙して今の世までもいひつたふそも明なるところに王法あり暗き所に天罰あり隠悪といへども必報あり悪人一旦盛なるとも餘殃の風にくじけて其技業を枯し善人一旦衰たるも餘慶の春にあひて再花咲時にあへり皆是天理のしからしむる所なりされば浮世の興亡榮枯人生の禍福吉凶一部れ小説に異るとなし其卷末を見ざれば曉し得とわたりを豈悟ざらめや

吾妻 雙蝶記 大尾
餘五郎

明治十九年八月四日出版御届
同年八月刻成

定價金壹圓

故人

作者人 山東京傳

東京府士族

翻刻出版人 小林迦十郎

神田區松永町廿四番地

發兌元 文福堂



